
秘密の宝物

godaccel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の宝物

【Nコード】

N6375R

【作者名】

godacccl

【あらすじ】

『SmileJapan』参加作品です。

幸せの魔法

「先生、魔法が使いたいです!」

「あら? 君はもう使えてるじゃない。誰もが出来ること、君しか出来ない魔法がね」

「先生、それは何なんですか?」

「あら? 君はもう知っているじゃない。君はその魔法を人に教えたことがあるじゃない」

「先生、僕は——」

「君はもう魔法が使える、その事実だけで充分じゃない」

先生はそれだけ言うと言と君の頭に手を起き、優しく撫でる。君はくすぐつそうに顔を緩ませた。

「ほら、君の魔法は特別」

咲いたような笑顔の先生に見られたあなたは、嬉しさと恥ずかしさの混ざったよく分からないけど悪い気はしない気持ちで、一層頬を緩ませた。

先生のそんな笑顔が君は大好きだった。

君は先生と別れて適当に町の中をぶらぶらと歩いている。そこかしこにある店から知った顔の笑顔に君は呼ばれながら、律儀に止まって返事をしながら君は町をどんどん進む。

それだけで町に笑顔が、活気が沸き上がっている。君は町の盛り上がり、埋もれながら、どんどん進む。

道を外れた近道を使って向かった先は、小高い丘に備え付けられた町を一望出来る展望台、君のお気に入り場所だ。

君はそこにいるもう一人を、まだ歳の若い少女、見て、また、顔を綻ばせた。

少女は無表情、いや、僅かにだが確かに頬を緩ませて、かろうじて笑顔と判断出来る表情を作った。

「久しぶり!」

「ひさ、ひさし……ぶり」

たどたどしい言葉の中にある嬉しさに君は喜ぶ。そして嬉しいと思わせる。

「元気だった？」

「……うん」

「辛いこととかなかった？」

「あったよ……、でも、でもね……、約束、したから。だから私ね、頑張った……よ」

途切れ途切れでも確かに伝わる気持ちに君はまた思われる、良かった、と。

幾分にも柔らかくなった少女の笑顔。まだ自然というにはほど遠いが、確かな笑顔に君は頬を更に緩ませられた。

約束。君が少女と結んだ約束。

「笑顔でいて」

「あなたの笑顔が、私の笑顔」

それだけ。しかし唯一無二。

「もっと凄い魔法があったら君の世界にいけて、君をもっと助けてあげたのに」

「……違うよ。私は、もう、大丈夫。向こうも安定した、し。だから私は一番、大切な気持ちを、伝えるために……、ここにきました」
君は居住まいを正して僅かに紅潮した少女に見つめられる。

「好きです。もう嘘はつきません、私はあなたが大好きです」

やっぱりまだまだ笑顔が嬉しい君はやはり笑顔で答えた。
「もっともっと、いつまでも、君の笑顔を見させてください」

「——はい！ 約束です。あなたの笑顔は」

「君の笑顔。二人で永遠に」

君は笑う。つられて少女も。
楽しくて笑う。

誰もが使えて十人十色。それ故にたった一人の魔法となるもの。
しかしその結果は変わらない。
笑顔の後の、幸せだけは。
永遠に。

私とあなた

あなたはガラス細工のように華奢な少女に見つめられながら、笑顔で少女に向ける。

少女が固まった顔で返してくれるのを嬉しく思われるが、感情が一つというのはいかがなことかと、何気なく考えた。

「感情を知ろう。そしたらもつと幸せになれるよ」

「感情？」

あなたは首を捻る少女に可愛いと、考えたこともないことに悔しいと思わされながら、でもやっぱり笑顔を作る。

こんなことを考えるのはきつと幸せの中にいるってことのはずだから。だから嬉しくて笑いたくなる。

「感情。まずは喜怒哀楽とかを出してみよう！」

「……うん」

両手の人差し指をこめかみ辺りに持つていき勢いよく上に上げた顔を向けられたあなたは思わず笑ってしまった。少女の顔が怒っているように見えるのだが、堪らなくおかしかったからだ。

たまらず笑ってしまったあなたを見た少女は訳も分からずつられて笑う。しかし指は離さなかったのでこれまたおかしい顔の出来上がりだ。

あなたはさり気なく少女の指を離してやり、言った。

「また今度にしようか、今はこのままでいいや」

「そう……？ 私ダメだった？」

途中で止めてしまったから不安になったのか、伏せ目がちになった少女。あなたはどうしたものかと頭を掻き、そして思いついた。

「それだよ、それが喜怒哀楽の哀。君はもう出来るようになったんだ、これは嬉しいことだね！」

笑う。気付いた少女もパチッと目を見開き笑う。

やっぱりこの笑顔は最高だなとあなたは思い、幸せに満ちた今を

笑顔で表現する。

この世にある一番の奇跡。

あなたと私、そんな当たり前の関係。

私達は一人には成り得ないのだ。

素晴らしい世界

あなたは笑顔で少女を見た。

すると笑顔が固い少女に見返された。

「なあに？」

「いや、君と一緒に楽しいなって思ってた」

「……そう？ 私も楽しいよ」

少女の笑いが眩しかった。

「おや、少年じゃないか」

笑顔で馬鹿馬鹿しいけれど充実した一日を過ごしていると、あなたは声をかけられた。

あなたは先生に手を振られていた。別れたときと同じ、笑顔のままだ。

「先生」

「いや、言わなくていい。笑顔に理由はいらないのだよ」

「先生……？」

「結果さ。君が笑顔である。それさえあれば私は笑顔になれる」

また先生に頭をくしゃくしゃと撫でられたあなたは顔を緩ませた。次に先生が少女に目を向けるのを見た。

「君が少年の魔法が使いたい理由だな。何々可愛いじゃないか。それに、良い笑顔だ。やはり少年の魔法は効果があるな」

「あ……いえ……そ、んな、可愛い……、なんて……」

「謙遜する事はない。笑顔の分可愛さが増していると思えば、可愛いと言われる分だけ笑顔ってことになるだろう？」

「あ……、は、はい……！」

「よろしい」

ニコツと笑った先生、少女の頭もあなたと同様に撫でられている。すると今までで一番自然な笑みを少女がしたのを見た。

「先生。先生はやっぱ凄いですね」

「凄くはない。もし凄いのならそれはきつと君のおかげだよ少年。君が私を凄くしているんだよ」

あなたは笑った。先生も少女も笑っている。花咲く笑顔が三つもある。

なんて素晴らしい世界何だろうか。

あなたは嬉しくてたまらなくて、心持ち笑いに幸せを混ぜたのだった。

ああ素晴らしきかなこの世界。

あなたも私も彼も彼女も、みんなみんな笑っている。

笑顔が連鎖している。

あなた達は一人じゃない、生きている限り一人にはならない。

だからあなたは笑えば良い。

笑わされて笑うのも良い。

けれどやっぱり笑ってみよう。

それがあなただけの魔法。

十人十色の幸せの魔法。

あなたの魔法はどんな宝物かな？

今はまだ、秘密になっている。

でもいつか、分かるときが来るよ。

だから今は、笑わされてでもいいから笑っていよう。

それは魔法。

笑顔を繋げる秘密の魔法。

みんなで繋げる笑顔の輪。

大きすぎて、当たり前すぎる、秘密の宝物。

素晴らしい世界（後書き）

完結です。

ご愛読ありがとうございました。

笑顔になれましたか？

あなたの笑顔はきっと自分の笑顔です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6375r/>

秘密の宝物

2011年3月20日01時10分発行